

優秀修士論文概要

京都西往寺所蔵木造宝誌立像について

長井 里緒奈

宝誌和尚は劉宋から梁時代(五世紀—六世紀)にかけて活躍した高僧で、その事績は没後から清時代に至るまでに成立した多くの伝記史料に記される。梁・慧皎(四九七—五五四)の『高僧伝』では神異篇に立伝されるように、宝誌は分身や預言といった数々の奇跡を行った神異僧として知られる。なかでも、画工の張僧繇の前で面部を裂いて十二面観音の面部をあらわした話は人間を超越した存在である宝誌の性格を端的に伝えている。

京都西往寺所蔵の木造宝誌立像(以下、西往寺像とする)は、僧形の面部が正中で縦に割れるように裂け、そこから観音の面部があらわれる特異な表現をとる。観音面には頭上面三面が認められ、まさに宝誌和尚が十二面観音へと変容する逸話の場面が表されている。

宝誌和尚は伝記史料によると死後、鍾山の独龍阜(現在の南京市江寧)に葬られ、墓所には精舎が建立され陸倕(四七〇—五二六)によって銘辞が造られたという。この銘辞は「誌法師墓誌銘」として『芸文類聚』に収録されており、最古の宝誌和尚の伝記史料である。また、遺像が各地に安置されたと伝わり、中国では十例近くの現存作例が報告されている。これらの作例のほとんどは伝記史料の記述に基づいて布の帽子を被り、複数の持物を掛けた錫杖を手に執る遊行僧の姿で表されている。八世紀頃にはすでに宝誌は十二面観音の化身であるという説が定型化していたとみられる

が、造形はあくまで文献史料に忠実であった。

一方、日本には八世紀頃から入唐僧によって宝誌像が請来された。なかでも奈良大安寺に伝わる宝誌像は現存せず、その詳細は不明である。ただ、大江親通の記録により木彫像で、かつ面部を裂き「仏身」があらわれる像容であったことが明らかである。本像は変容の造形をとる宝誌和尚像として西往寺像とはほぼ同時期に存在しており、日本における宝誌像の造形的起源を探るうえで重要である。また、現存作例として大分羅漢寺の五百羅漢像のうちに宝誌像が確認される。本像も僧形面が裂けて菩薩面をあらわす像容をとる。ただし、大安寺像と羅漢寺像は共に手で面部を裂き広げているのに対して、西往寺像は両手を面部にあてず、あたかも自然と面部が裂けたような表現をとる点で特異な造形表現といえる。

また、中国と日本の宝誌説話をそれぞれとりあげて相違点を明らかにした。日本の宝誌変容説話は平安時代後期以降に成立した説話集および事相書にみえるが、これらは中国の宝誌変容説話を受容して成立したとみられる。これらを比較すると中国では宝誌は面部を切り裂いて十二面観音面をあらわしたのに対して、日本では菩薩面をあらわし、その姿は聖観音や十一面観音、千手観音といったいくつかの観音の姿として認識された。日本の変容説話では十二面観音という特定の姿ではなく、ひとつの姿に留まらない観音の性格が強調されている。これはわが国独自の宝誌信仰の在り方といえよう。

西往寺像の手勢に着目すると、両手を胸前で強く屈臂している。これは經典に説かれる通形の十一面観音像の印相には一致せず、天台系に多くみられるような聖観音の印相を意識したものと思われる。これは日本における宝誌変容説話の反映で、いくつもの姿を持つ観音を象徴的に表現したと考えられ、そこには聖観音のイメージも含まれていた。西往寺像が中国の作例にみられた布帽や錫杖といった宝誌和尚のアトリビュートを表さない

点からも宝誌の肖像というより観音像であるということが強く意識されたとみられる。

また、西往寺が所蔵する近世の縁起「西往道場中観自在菩薩本縁起文」（以下、「西往寺誌公縁起」とする）には宝誌和尚の伝承と西往寺像の伝来が記されるが、変容場面では「面の皮のひとり左右にわかり」とあり顔の皮が自然と左右に分かれたという。このような表現は他の宝誌変容説話には確認できないオリジナルな記述である。いくつかの文献史料の記述を貼り合わせにする本縁起の性格をみるに、同表現をとる別の本から引用した可能性があるため西往寺像の形状も引用元の変容描写を参考にした可能性があらう。

西往寺像は像高一五九・八センチ（五尺三寸）を測る等身の立像である。カヤ材による一木造りで一材より両手先、両足先以外の全容を彫出する。表面は彩色を施さない素地仕上げで、背面を除く全面、頭部や袖の内側に至るまで水平方向の細かな鑿目を留めている。

西往寺像の専論は毛利久氏の研究が唯一である。本像の製作時期について毛利氏は、一木造りで「温雅な相好や低平な衣文の手法」であることから、「藤原時代におくのが妥当」と述べる。また、西往寺像が重要文化財に指定された一九九八年の「新指定の文化財」では、総じて衣文線の鑿がなだらかであることから平安時代後期も十一世紀頃の作としている。

西往寺像の伝来について「西往寺誌公縁起」によると本像はかつて「伊豆国庭冷山」に安置されていたという。先行研究では当地が現在の静岡県賀茂郡河津町に位置する天嶺山にあたと示される。当山北麓には南禅寺が所在し、西往寺像と当寺に伝わる地藏菩薩像や梵天像、帝釈天像との作行の類似性などが指摘されている。また、西往寺像にカヤ材が用いられていることは、当寺の木彫群の仏像をカヤ、神像をクスノキとする用材観とも一致する。これらは西往寺像の安置場所を特定するものではないが、「伊

豆国庭冷山」との伝承の妥当性を高めるものである。

併せて一木造り、素地仕上げといった特徴から檀像を意識した製作が行われていた可能性が高い。かつて円仁によって長安から将来された「壇龕僧伽誌公遇迴三聖像」は檀龕像であり、また北宋時代に成立した『石門文字禪』には梁武帝が紫栴檀に宝誌像を刻ませたという話が載る。よって中国では檀木の宝誌像が製作されていた可能性が高い。なお、西往寺所蔵の「誌公像賛」で元禄年間に複数の僧が西往寺像を「栴檀像」や「紫栴檀像」と称していることを踏まえれば、西往寺像についても製作当初から檀像として意識されていた可能性があらう。

また、先行研究で指摘されているように西往寺像のプロポーシオンは両手先、両足先を除いて一材から彫出することによって頭部の大きさに対して肩幅が極端に狭く窮屈な印象を与える。とくに下半身の裾部にかけては細かく彫りこまず立木仏のように材の形をそのまま残すように彫刻されており、材木への特別な意識があったことがうかがえる。霊木を用いている可能性も指摘されよう。

最後に西往寺像の鉦彫と安置場所に着目して製作背景について検討した。西往寺像は背面以外のほぼすべての表面に鑿痕を留めている。特に頭部には十一面観音の面部や耳を含めて頭頂部から首に至るまで水平方向の浅い鑿目が確認できる。西往寺像の鉦彫については浅井和春氏が神異僧である宝誌和尚の「奇瑞を象徴する肉身部」に用いられていることが重要であると述べている。

鉦彫像について奥健夫氏は荒彫のような鑿痕を表面に残す最も早い例が、四天王像の邪鬼にみられることを指摘した。特筆すべきはこのような手法が四天王像本体ではなく邪鬼像のみにみられる点で、その理由について災厄をもたらず荒神としての性格を視覚的に表現していると述べる。また、鉦彫像が十一面観音に多いことを指摘し、その理由について長谷寺本尊像

をめぐる説話をとりあげる。鉦彫は造像後も像や像周辺にとどまり続ける樹神（疫神）という概念を前提として、その力を押さえつける「疫神の上位者としての観音の性格」を表すために用いられたと論じている。

また、鉦彫と疫病消除との関係を示唆する事例として兵庫県豊岡市城崎町に位置する温泉寺の本尊十一面観音像が注目される。本像は二二三・五センチを測る鉦彫像のなかでは巨大な像で、十世紀に造られた鉦彫像の初期作例である。当寺は城崎温泉との関係が深いことで知られる。温泉には寺社が並置されることがあり、この特殊な信仰空間では薬師如来に限らず観音、とくに変化観音が祀られ、病氣治癒の効験が求められていた。

西往寺像もまた原所在地の伊豆天嶺山付近は古代から有数の温泉地として知られていた。観音像としての役割が強く求められ、それに伴って疫病消除や病治癒を効験とする鉦彫技法が用いられたのであろう。「西往寺誌公縁起」には西往寺像に病治癒の靈験を求めた逸話が記されている。ただ、宝誌和尚の行状と病氣治癒との直接的なかわりは宝誌の伝記史料に見出せなかった。しかし、宝誌と観音とは同一の存在であるとみなされていた。変容説話において宝誌が面を裂いて十二面観音面をあらわした場面は、観音に変身したのではなく元来観音である宝誌が真の姿を明らかにした場面といえる。よって西往寺像は宝誌和尚の肖像というよりも、変化する観音としての性格が強調されたのではなからうか。

平安時代の変化観音の像には、たとえば奈良靈山寺の十一面観音像のように異相をとるものがある。中野玄三氏は、変化観音の出現が山林寺院の呪術的性格に端を発することを踏まえて、こうした特異な姿で表された靈山寺像は「怨霊を鎮圧しうるだけの恐るべき威力をあらわしていると同時に、怨敵を折り殺す「呪詛の像」としての性格をも付与された変化観音」であるとする。すなわち、異形表現は像が持つ靈驗力、威力を強めるものとして用いられたとみられる。西往寺像の面部が裂け、十一面観音が出現

するという異相もまさに病氣や疾病を抑えつけようとする強い祈りのあらわれといえよう。